

“仮借”は“仮の借物”

中国では、“仮借”がどんな場合に用ひられたかと言ふと、第一には、ある言葉がどうしても文字に表すことが出来ない場合である。例へば、数字の“十”がこれである。

“十”といふ字は、元は“針”の形(針に糸を通した形だと思つたらよい)を表した“象形文字”で、本来は“針”といふ意味の字であった。ところが、“針”といふ言葉と、数の“十”といふ言葉とがたまたま同じ発音であったことから、“針”といふ言葉を表した“十”といふ字を借りて、数の“十”を表すことにしたものである。

では、なぜ数の“十”は他の字を借りたかと言ふと、数の“十”を表す字がどうしても作れなかったからである。“一”や“二”のやうには簡単に作れないからである。然し、作れないからと言ってそれで済ませるわけには行かないので、同じ発音、もしくは似た発音を借りて間に合せようといふことになって“十”を借りたのである。

ところで、「^{ひさし}廂を貸して^{おもや}母屋を取られる」といふ^{ことわざ}諺があるが、漢字にはかういふ例が実に多い。借りる方はどうも仕方が無くて借りたのだから、共用の煩はしきは初めから承知であるが、貸した方は煩はしくなると、その字を気前よく借り手に明け渡してやって、自分は別の字を作っ

てそれに移り換るといふわけである。

今まで“十”と見れば即座に“はり”と読めたものが、仮借されると“はり”かな、それとも“数の十”かな」と考へて区別しなくてはならなくなるのだから、“はり”にとっては迷惑なわけである。

そこで、“はり”は気前よく“十”を“数”に明け渡してやり、“はり”の材料の“金”を“十”に付け加へて“針”といふ新しい字を作り、これを“はり”専用の字としたわけである。

“釘”といふ字も、母屋を明け渡して出て行った先の字である。“丁”が“くぎ”の形を表してゐて、これが“くぎ”の本字だったのであるが、“くぎ”を“一丁”“二丁”と数へたところから、「物を数へる時に使ふ言葉」になり、専らその意味に使はれるやうになると、その方に“丁”を明け渡し、“針”と同じやうに、材料の“金”を加へて“釘”といふ字を作ったのである。

ついでに言ふと、“源”も“原”が本字である。“原”といふ字は、崖を表した“^{げん}厩”に“泉”といふ字を加へて、泉の湧き出る所(水源地)を表した字である。“高原”といふ意味に使はれるやうになったため、これは水の意味の“^ゝ”を加へて“源”としたものである。然し、この字は“原始”“原子”など、元の意味にも使はれてゐる。